

平成30年 8月31日 [金曜日]

# 北 海 道 通 信

道河川財団が技術講演会開く

## 豪雨激甚化前提に対策を

講師に中央大・山田教授

北海道河川財團は二十一日、ホテルボルヌターレ幌で河川技術講演会を開催した。後援は開発局と寒地

ら三百人程度が参加した。

治山・治水緊急提言の内容を紹介。「科学的に想定される巨大災害の被害、技術的対策の効果を技術的かつ

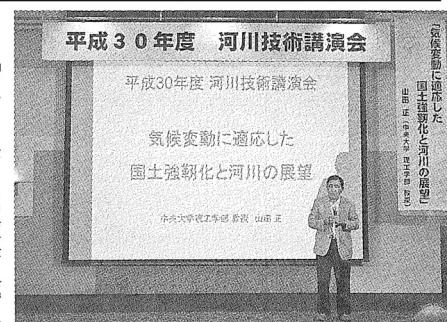
ステストを五年で終えて必要な対策を割り出し、その後十五年間で合理的な対策を可及的速やかに実施して

サシブルーテータを用いた最大降水量の水文頻度解析により、従来では想定外にして扱われるような豪雨を

講演会は、河川にかかる  
新の研究成果等の発表によ  
り技術力向上に資することと  
を目的としたもので、後援  
機関の職員のほか、道、札  
幌市、コンサルタント業者

日本研究所。中央人理工学部の山田正教授が「気候変動に適応した国土強靭化と河川の展望」を題し講演。豪雨の激甚化を前提とした防災対策を強化すべきと強く調した。

土木研究所。中央大理工学部の山田正教授が「気候変動」についての講演を行なった。



## 防災対策強化を呼 びかける山田教授

## 一 応用④降雨の不確実性に基づく

防災対策強化を呼びかける山田教授  
堤防の信頼性評価⑤洪水時

の避難情報および浸水状況が住民の避難行動へ及ぼす影響の五点。

「これが重要」との考え方

「政府は民心の安定、  
示した。その上で  
年の豪雨災害について」  
候変動による豪雨の頻発傾

公共福祉の増進のために抜本的な治山。

治水対策を早急に実行しなくてはならぬのである。豪雨の激甚化を予見して、河川工事に着手するが、これが河川改修工事である。

展開しないにわかはならぬ」とし「国土全体のストレ

ストを五年で終えて必  
策を割り出し、その  
最大降水量の水文頻度解  
サブルデータを用いたた

五年間で合理的な対策により、従来では想定外となり取扱いが困難にな

河川計画に取り込むことが、及的速やかに実施していく扱われる。豪雨をすることを提言した。

可能となることを示した。  
④では、河川水位の確率

の導入による水文統計  
・確実性評価の日と全  
分布と堤防の安定性の確  
実性評価

不確実性評価の日本における大雨の発生特有分布を考慮することで壊滅的破壊の確率分布が求めらる。

計的分析③確率過程論  
よく不確実性を有する  
確率と余裕高の関係につい  
ることを示し、堤防の破壊

システムの予測に関する  
降雨水流出過程への  
て報告した。